

『般若灯論』第11章⁽¹⁾ 試訳

Bhāvaviveka's Prajñāpradīpa Chapter XI

望 月 海 慧

<0>第11章の目的 (P.170b4, D.138b1, AP.283b3, AD.244a4, T.86c16)

今度は、事物は無自性であることに対立する特定の主張を否定することによって、輪廻は無自性たることを示す目的により第11章⁽²⁾は著わされている。

<1>輪廻が存在することの否定

<1.1.>世尊の教説に対する解釈

<1.1.1.>ある仏教学派⁽³⁾による輪廻の存在論証 (P.170b5, D.138b1, AP.284b2, AD.245a1, T.88c18)

ここに言う。勝義として、蘊はまさしく存在する。何故ならば、世尊は名称と特徴と示してから、それを尽くすための教説を示しているからである。およそこの世に存在しないものには、名称と特徴を示すことと、それを尽くすための教説を示すことも、正しくはない。例えば、第二の頭にある眼の病気をなくす如し。それら（輪廻）に対して名称と特徴を示し、それを尽くすための教説を示すことは次の通りである。「比丘たちよ、輪廻ははじめとおわりがない。すぐれた教えを知らない凡夫には、輪廻は長い⁽⁴⁾」と。あるいは同じように、「比丘たちよ、その如きなので、あなたは、輪廻を尽くすために努力すべきで

『般若灯論』第11章試訳（望月）

ある、というように学ぶべきである⁽⁵⁾」と説かれたものがあるので、それ故、理由概念をその如く示したことにより、蘊はまさしく存在する。

<1.1.2>Bhāvaviveka の批判 (P.171a2, D.138b4, AP.285a5, AD.245b3, T.86c26)

ここに答える。世間主は、生じ続ける業と煩惱により生起させられた幻や陽炎のような生じるものと対立する生じないものが、連続し、断絶しないことを観測してから、「凡夫たちの輪廻は長い」と説き、生じることは多種の苦しみの原因 (nidāna; gleṇ gshi) となるものである⁽⁶⁾ので、輪廻を尽くすために、敬礼をなす者に⁽⁷⁾応じて説くことがそのように説かれたのである。考察の本質もっている者が、よく考察したならば、勝義として、輪廻と涅槃との特徴は何も認識されない⁽⁸⁾ので、世尊は勝義としてお説きになったのではない。それ故、もし「名称と特徴を示してから、それを尽くすための教説を示す」というそれが、勝義であると認めるのならば、理由概念の意味は成立しないものである。世俗の理由概念であると仮定するのならば、意味は矛盾するものであるし、喩例も存在しないものである。

<1.2>輪廻のはじまりが存在することの否定

<1.2.1>世尊の教説に対する解釈

<1.2.1.1.>Bhāvaviveka による偈の解釈 (P.139a1, D.171a7, AP.286a5, AD.246b2, T.87a6)

「輪廻は、はじめも おわりもない」とお説きになっていることは、この場

合、無因論者を排除するための「事物は原因より生じる」という世尊による説法で、生起を示す主張をお説きになっているもの⁽⁹⁾、それを批難しようとする外道の者により、世尊に対して「どのように輪廻の

前の辺際は知られるのか」と問われた時、偉大なムニは「（知られない）」と説かれたのである。

輪廻は、はじめとおわりがない。それには、前もなく、後ろもない⁽¹⁰⁾。—— 1

そのうち、輪廻は遍行であって、生と老死の考えられる長さの連続は間断がないものである。はじめとおわり (avarâgro) は、はじめとおわりと (avarâgrau) であり⁽¹¹⁾、それには、はじめとおわりがないので、前と後ろもない、とお説きになっている。何故ならば、一つの原因から一つのものとして連続するものには、はじまる時は、確定することがないからであり、それとは反対のはじまらないものには、おわりが成立しないからであり、言語慣習としてではある⁽¹²⁾が、勝義としてではない。それ故、以上が、(Pūraṇa Kāśyapa などに対する)⁽¹³⁾ 解答の語である。

<1.2.2> Bhāvaviveka による論証式 (P.171b4, D.139a4, AP.287b3, AD.247b4, T.87a14)

以上のことから、世尊に対して、誤ったことを説かない人であるという信頼が本当に生じる者たちには、彼の人を信頼できるであろうが、正しい認識根拠のように頭われてるもの⁽¹⁴⁾により心が迷っている他の者たちは、信頼しないだろうし、ムニの根本のこの説法も、師 (Nāgārjuna) の綱要 (muṣṭi; dpe mk-hyud) と離れているので、それ故、この意味を他の者に対して示すことので

『般若灯論』第11章試訳（望月）

きる推論が示されるべきである。最初の却の有身の身体と根と慧の集まったものであるそれは、他の世において集積された業が善・不善の原因となるものである、と知るべきである。何故ならば、楽・苦、法・非法などが生じる原因であるから。例えば、現在の身体と根と慧の集まったものの如し。同じように、共通でないものを取る原因となるものと、利益を与えられるものと利益を与えるものと、滅することのある基体などといった理由概念と、主張命題と、喩例がそのように示された推論が、詳しく説かれる。残り（主張命題と喩例）は、前と同じである。

<1.2.2.>対論者による輪廻のはじめの存在論証に対する否定

<1.2.2.1.>外道による存在論証（P.172a3, D.139b1, AP.288b6, AD.248b5, T.87a22）

ここに外道の者が言う。輪廻には、はじめが存在する、と説くべきである。何故ならば、おわりが存在するから。およそおわりが存在するようなものには、はじめも存在すると経験上知られている。例えば、瓶の如し。同じように、⁽¹⁸⁾真実知が生じる輪廻にも、おわりが存在するので、それ故、理由概念を以上のように示したことにより、輪廻は、はじめがあるものとして説かれるべきである。

<1.2.2.2>Bhāvaviveka の批判（P.172a5, D.139b2, AP.289a3, AD.249a2, T.87a25）

それに対して、ここでは、

『般若灯論』第11章試訳（望月）

輪廻だけが、前の辺際が存在しないのではなく、一切の事物たるものにも、前の辺際が存在することはない——〔8〕

と後に示すので、瓶などのはじまりのない一つの原因から一つのものとして連続してから生起するものにも、はじめが存在することは成立しないので、論証式の喩例は不完全である過失がある。「おわりが存在するから」という理由概念の意味も成立しないものである。何故ならば、輪廻は辺際を伴うものである、などの区別は、⁽¹⁷⁾聖教においては不可言説であるから。

<1.2.2.3>他のある者の批判 (P.172a8, D.139b4, AP.289b7, AD.249b4, T.87b2)

他のある者が、「もし輪廻は、はじめがない、と主張するのならば、その場合、それを尽くすこともない、と知られる。何故ならば、はじめがないものであるから。例えば、人や虚空の如し」と言う。

<1.2.2.4>Bhāvaviveka の反論 (P.172b1, D.139b5, AP.290a3, AD.250a1, T.87b10)

人もその他のものも、⁽¹⁸⁾適当ではない。何故ならば、生じないものは、言語慣習としても認められないので、喩例の主語は成立しないことの過失がある。世俗の主張としても、米などのはじまりがないものに、⁽¹⁹⁾反対のものが生起することにより、⁽²⁰⁾辺際が経験上知られるので、意味が矛盾したものである。

<1.2.3>世尊の一切智者たることに関して

<1.2.3.1>他のある者の批判（P.172b3, D.139b6, AP.290a8, AD.250a5, T.87b7）

我慣をもって迷乱している他のある者は、「世尊は一切智者ではない。何故ならば、『輪廻の前の辺際は知られない』と言って、自分自身が知らないことを認めているから。例えば、普通の人が、生命がなくなってどこに去るのかわからない、という如し。」と言う。

<1.2.3.2>Bhāvaviveka の反論（P.172b4, D.139b7, AP.290b5, AD.250b3, T.87b10）

それは正しくない。他の者が「輪廻は、はじめがある」と考えることを排除するために、「前の辺際は知られない」と説くそれは、輪廻は、はじめがないものであることを示す語義であるので、輪廻には、はじめがないものであるから、知ることができないものであると知っているからであり、輪廻は、はじめがないことを示すことにより、世尊はそれに対して障礙がないので、それ（対論者の主張）は、分別をしないで説く者が、他の偉大な力に対して嫉妬することの原因と同じである。

<1.2.4>第一偈の確認

<1.2.4.1>Bhāvaviveka による論証（P.172b7, D.140a2, AP.291a4, AD.251a1, T.87b14）

論書の意味は、詳しくは、如来を考察する章より考察されるであろう。考察の広論を止めること⁽²²⁾の主題たるものが示されるべきである。ここに、この（第

『般若灯論』第11章試訳（望月）

一) 偈により、輪廻の属性 (dharma) は、はじめとおわりがないものであることを示している。それ故、推論は、勝義として、蘊は、顕現しているそのように存在するものではない。何故ならば、はじめとおわりがないから。例えば、幻術師による幻の人の如し。

<1.2.4.2>或る賢者の反論 (P.173a2, D.140a4, AP.291b3, AD.251a7, T.87b16)

ここに或る賢者で知慧をもつ者が、「幻術師による幻の人の場合も、認識作用を分別することのないものの対象たる物質で存在するようなものは、後の時にも、同じように存在するので、喩例が、論証される述語 (sādhyadharmā) をともなっていないことにより、ありえない」と言う。

<1.2.4.3>Bhāvaviveka の批判 (P.173a4, D.140a5, AP.292a2, AD.251b5, T.87b22)

それは正しくない。幻術師による幻の人という邪妄として顕現したものは喩例として認められるからであり、認識作用は分別のない対象領域の物質などに対しても、人の自性により空であるから、喩例は成立するので過失はない。その如くなので、輪廻は存在することは成立しないので、「名称と特徴を示してから、それを尽くすための教説を示しているから」という理由概念の意味は成立しない。

<1.3>輪廻の中間が存在することの否定

<1.3.1>対論者の主張 (P.173a6, D.140a6, AP.292b1, AD.252a4, T.87

b22)

ここに言う。勝義として、「蘊の連続」という輪廻はまさしく存在する。何故ならば、その中間が存在するから。およそこの世に存在しないものには、中間を認知することはない。例えば、兎角の如し。輪廻には、いかなる場合でも雑染と清浄というものがある中間が存在するので、それ故、輪廻はまさしく存在する。そのことから、理由概念の意味が成立しないことと矛盾することはないので、主張することの意味は成立する。

<1.3.2>Bhāvaviveka の反論 (P.173b1, D.140b1, AP.292b6, AD.252b1, T.87b26)

ここに答える。

はじめとおわりがないものに、中間はどこにあらう⁽²⁴⁾——2ab

それには中間は存在するものではない、という語義である。幻術の作った人の連続には中間は存在しない如し、という意味である。⁽²⁵⁾ そのように、はじめとおわりとは成立せず、喩例は存在しないので、そのように示した過失が退くことは成り立たない。それ故、そのように考察すれば、輪廻は無自性であり、

それ故、それに前後と同時の順序は成立しない⁽²⁴⁾——2cb

⁽²⁶⁾
生と老死との、である。

<1.3.3>ある者の批判 (P.173b4, 140b3, AP.293a6, AD.253a1, T.87c5)

『般若灯論』第11章試訳（望月）

それに対しある者が、「輪廻は自性が存在する。何故ならば、生と老死とを伴うから。石女の子といった存在しないものが、生と老死とをともなうのは正しくない。」という、

<1.3.4> Bhāvaviveka の反論 (P.173b5, D.140b3, AP.293a7, AD.253a1, T.87c8)

それらにも、生と老死との前後関係は成立しないので、理由概念の意味が成立しないものであり、勝義としては生などをともなうものは何であれ自性が存在することが成立しないので、喩例はありえないものであり、意味が矛盾したものである。

<2> 生と老死との前後関係の不成立論証

<2.1.> 生が先の場合 (P.173b6, D.140b4, AP.293b3, AD.253a4, T.87c9)

例えば、生などの前後と同時との順序は成立しない如きを、次のように考察する。

もし生が先に成立して老死が後ならば⁽²⁷⁾——3ab

もし対論者が主張するようならば。その如きならば、

生は老死がないものであり、まだ死んでなくても生じるであろう⁽²⁷⁾——

3cd

『般若灯論』第11章試訳（望月）

そのようならば、生には老死の自性がないものになろう。何故ならば、老死がなくても生じるから。何であれ存在しないものとして生じるものには、その自性はないから。例えば、牛は馬がいなくて生じることは、それ（牛）にそれ（馬）の自性がない如く、という意味である。さらにまた、まだ死んでなくても生じることになろう。何故ならば、先に他処で死ぬことのない生であるから。

それらは成り立たない。⁽²⁸⁾そこにおける生は生起で、まだ生じていないものから生じることである。老は身体が変化することである。死は生命の根が減することである。それに対して、ここでは、すきまのある語であるから、すきまのある語から転じることによる推論を明らかにする。生は老死により先であるのではない。何故ならば、その主体であるから。例えば、火は熱により先であるのではない如し。

<2.2>老死が先の場合（P.174a4, D.141a1, AP.294a7, AD.253b7, T.87c20）

もし、過失がそこに成立するなら不合理である、と考えて、老死を先のものとして認めるのならば、その如きなら、

もし生が後に成立し、老死が先であるのならば——4ab

その如くなら

生のない老死は無因であり、どのように成立しよう——⁽²⁹⁾4cd

他の論者も、「生の縁による老死」というものを認めるので、それがなけれ

『般若灯論』第11章試訳（望月）

ば生じることのない老死は、縁がなくしてどのように生じよう。生がない老死はまさしく存在しない。何故ならば、まだ生じていないので、（老死は）根拠がないものであるから、という意味である。

以下に推論を（示すと）⁽⁸⁰⁾、老死は生によるので、先であるとは正しくない。何故ならば、それ（生）があれば、（老死は）生起するから。例えば、住することのように。

<2.3>生と老死が同時な場合（P.174a8, D.141a3, AP.294b3, AD.254a4, T.87c27）

もし生が老死と随伴するように存在するので過失はない、というのならば、

生と老死とが同時であることは正しくない⁽⁸¹⁾——5ab

（過失は）何になるのか、といえ、何故ならば、そのように考えるとすれば、

生じつつあるものに死が成立するだろうし、無因ともなろう⁽⁸¹⁾——5cd

それら二つが減することは対立するものなので、「生」というものも成立しないだろう。何故ならば、現に生じつつあるものが死んでしまうから。そのように、生がなければ、前のもののように、生と老死の両方とも無因となってしまう。何故ならば、同時に生起するから。例えば、生の原因は老死ではないというように、その二つの原因は生ではない、という意味である。もし「同時に生じるものも原因である。例えば、相と種好（という特徴）と、大士（という特徴づけられる者）の如し」というのならば、それは返答ではない。何故なら

『般若灯論』第11章試訳（望月）

ば、否定は前に、すでに示しているから。⁽³²⁾それ故、生と老死とは、同時は成立しない。

<2.4>前後関係不成立の論結（P.174b5, D.141a6, AP.295a5, AD.254b4, T.88a5）

それ故、以上のように考察すれば、

前後と同時という順序が成立しないのに、その生とその老死とが何故
戯論されるのか⁽³³⁾——6

勝義として、それを戯論することは、まさしく正しくない。何故ならば、それらは生起しないから、という意味である。

以上のように、輪廻を論証する理由概念は、生と老死とをとともなうことが成立しないので、対論者が章の最初に説いた理由概念の意味が成立しないという過失に対する解答をなした。

<3>前後・同時の不成立の他への適用

<3.1>第7, 8偈の解釈（P.174b7, D.141b1, AP.295b3, AD.255a2, T.88a10）

さて、ācārya (Nāgārjuna) は、生などの前後と同時の順序が存在することは認められないように、残りの事物に対しても同じように示すことを述べてから解釈している。

『般若灯論』第11章試訳（望月）

原因と結果，特徴と特徴づけられるもの，感受作用と感受する者，と
いった存在するようなものは，どのようなものにも適用される——7⁽³⁴⁾

認識根拠と認識対象，能知と所知，解脱と解脱の特徴，とである。

輪廻だけが，前の辺際が存在しないのではなく，一切の事物たるもの
にも，前の辺際が存在することはない——8⁽³⁵⁾

<3.2>適用の実例

<3.2.1>原因と結果（P.175a2，D.141b2，AP.296a2，AD.255a7，T.88a1
8）

それについて，まず，原因と結果，特徴と特徴づけられるものについてはじ
めてから，一部分が解釈される。⁽³⁶⁾

勝義としては，米は芽より先に存在するものではない，と知るべきである。
何故ならば結果であるから。例えば，芽の主体の如し。もし「相続が分断して
いるものの結果は，前の時に生じるものにより不確定なものである」というの
ならば，それらも，勝義としては同じように否定されるので，異類は存在しな
いことにより不確定なものではない。

もし結果が原因により先であると主張するのならば，勝義としては，結果は
原因により先とはなされない。何故ならば，無因の過失になってしまうから。
誰であれ，「原因の中に結果が先に存在することは明らかにされる」という者
たち⁽³⁷⁾に対しても，結果が諸縁により明らかにされることは成立しない。何故な
らば，それら（縁）が消滅することによりそれ（結果）も滅するから。例え
ば，泥などが消滅することによる瓶のように。何であれ（A），何らかのもの

（B）により明らかにされるものは、それ（B）が減することにより、（Aが）減することはないであろう。例えば、太陽、宝石、灯、薬の光が消えることにより明らかにされた椅子や台座が減することはない如し、と説かれるべきである。明らかにするものが先に生じるので、結果が先ではない、と説くのであ⁽³⁸⁾る。

原因と結果とは同時のものである、というのならば、それも正しくはない。もし同時である、というのならば、そのような場合、勝義としては、米と芽とが同時に生起することは原因と結果の事物としては適当ではない。何故ならば、同時に生起するものであるから。例えば、牛の角の如し。

<3.2.2>特徴と特徴づけられるもの（P.175b2, D.142a1, AP.297b3, AD.256b6, T.88a2）

同じように⁽³⁹⁾、（牛の）隆肉などの特徴も、特徴づけられるものにより先と認められるのではない。何故ならば、基体が存在しないから。例えば、模様が生により先のものではないように。

同じように、特徴づけられるものも、特徴により先のものであることは正しくない。何故ならば、隆肉などの特徴づけられるものであるから。例えば、大士が諸々の特徴により先であるということは正しくなく、また、地面が堅いことにより先であるということは正しくない如く。

特徴と特徴づけられるものが同時に生起することも、特徴と特徴づけられるものとしては認められない。何故ならば、同時に生起するものだから。例えば、香と味という同時に生じるものの如し。くわしくは前の通りである。⁽⁴⁰⁾

<4>論結（P.175b5, D.142a3, AP.298a7, AD.257b1, T.88b5）

『般若灯論』第11章試訳（望月）

以上で、ここで章の目的は、対論者が章の最初に示した論証の過失を述べたことにより輪廻は無自性であることを示したものである。⁽⁴¹⁾

< 5 > 教証 (P.175b6, D.142a4, AP.298b4, AD.257b5, T.88b7)

それ故「同じように、この世では誰も輪廻せず、涅槃に入らず、煩惱をもたず、清浄とはならない」など、⁽⁴²⁾

また同じように「梵天よ、私は輪廻も把握できず、涅槃も把握できない。それは何故にかというと、如来が輪廻をお説きになっても、誰も輪廻しないであろうし、如来が涅槃をお説きになっても、それを誰も涅槃としないであろうか」⁽⁴³⁾ など、

また同じように「善勇猛よ、色は生じることも滅することもない。受・想・行・識も生じ滅することはない。善勇猛よ、色・受・想・行・識が生じ、又は滅することがないそのことが知恵の完成である」⁽⁴⁴⁾ など、

また同じように「善勇猛よ、前と後と中の極限のないことが、涅槃の究極である。そのように説かれる如くではない。一切法が辺際のないことが、涅槃の究極である」⁽⁴⁵⁾ などと説くこれらが証明されるのである。

師 Bhāvaviveka により著わされた、『根本中』の注『般若灯論』より「輪廻を考察する」という第11章。

〔註〕

- (1) 本稿は、Bhāvaviveka による『般若灯論』(Prajñāpradīpa; Dbu ma'i rtsa ba'i 'grel pa śes rab sgron ma) の第11章のチベット語テキストからの試訳である。テキストとしては、デルゲ版(No. 3853, 『デルゲ版チベット大蔵経』論疏部, 中観部, 第2巻, 世界聖典刊行協会, 1977, 以下“D”)と、北京版(No. 5253, 『北京版チベット大蔵経』第95巻, 中観部一, 西藏大蔵経研究会, 1957, 以下“P”)

『般若灯論』第11章試訳（望月）

を用いた。また、Avalokītvratā による註釈 (Prajñāpradīpaṭika ; Śeṣaḥ sgron ma'i rgya cher 'grel pa, デルゲ版, No. 3859, 以下 "AD", 北京版, No. 5259, 以下 "AP") を参照し、該当箇所を示した。なお『般若灯論』の漢訳 (『大正新脩大藏經』第30卷 No. 1566, 以下 "T") に関しては、チベット訳との差異が多いので、該当箇所を示すにとどめた。

次に、Bhāvaviveka の輪廻観に関しては、まず、『般若灯論』に関しては、第16章の冒頭においても論じられている (古坂紘一「中観における輪廻観の否定」『大阪教育大学紀要』第1部門第29巻第2・3号, 1980, 『同』第30巻, 第1・2号, 1981)。また『中観心論』に関しては、第3章第85—99偈において論じられている (江島恵教『中観思想の展開』1980, pp.288—293, pp.423—425)。なお『中観心論註・思沢炎』の該当箇所は、デルゲ版, No. 3856, dsa 77a5—81a7, 北京版 No. 5256, dsa 83a5—87a3 (野沢静証「清弁造『中論学心髓の疏・思沢炎』」『密教文化』68号, 1964) である。

- (2) 本章のタイトルに関しては、註釈書により二種にわかれる。一つは、"Pūrvāparakoṭi ; sñon dan phyi ma'i mtha' ; 本際" というもので、Candrakīrti, 青目の註釈にみられるものである。もう一つは、"saṃsāra" ; 'khor ba ; 生死" というもので、Buddhapālita, Bhāvaviveka, Sthiramati 及び『無畏註』にみられるものである。
- (3) Avalokītvratā の註 (以下 "PPT") に、"rañ gi sde ba dag" とある。なおこの後に、『中頌』第10章第15偈を引用する。
- (4) この引用は、前半と後半とが、異なるテキストからのものと考えられる。まず、前半は、Saṃyutta-Nikāya, vol. II, ed., by M. L. Feer, P. T. S., 1970, p.178, ll. 8—10, 同 p. 186, l.13—; 同 vol. III, 1973, p.149, l. 25— (『南伝大藏經』第13巻相應部二 p.261, ll. 7—8 ; 同 p.273, l. 11—; 同第14巻 p.234, l. 9—; また漢訳の該当箇所を最初のもののみ示しておく。『雜阿含經』大正藏經第2巻 p.241b1—, 『別訳雜阿含』同 p.486c—) にみられる。Pāli 文を掲げておくと、"Bhagavā etad avoca // Anamataggōyaṃ bhikkave saṃsāro pubbakoṭi na paññāyati avijjānivarāṇānaṃ sattānaṃ taṇhāsamyojanānaṃ sandhāvataṃsaṃsāratam // " というものである。この文章は、無畏註 (ここでは、"thog ma dan tha ma med pa'i mdo" とある) を、青目注 (三枝充恵『中論 (中)』, 1984, p.336—337, では羅什の『無本際經』を、『中阿含經』第51『本際經』 (大正1巻 p.487bc) とし、相当するパーリ文はない、とするが、Max Walleser, Die Mittlere Lehre des Nāgārjuna ; nach der chinesischen Version übertragen, Heidelberg, 1912, p.73, には、Saṃyutta-Nikāya と指摘している) 及び、Prasannapadā においても引用される。後半は、Dhammapada 第60偈後半 (水野弘元『法句經の研究』, 1981, pp.106—107, cf. Udānavarga, I. 19cd, ed. by Franz Bernhard, Göttingen, 1965, p.102.) にみら

『般若灯論』第11章試訳（望月）

れるものである。Pāli 文は, "digho bālānaṃ saṃsāro saddhammaṃ avijānataṃ" というものである。この文章は, Buddhapālita 及び Sthirāmāti の註釈にも引用されている。

- (5) 現時点では, はっきりした出典は identify されていない。
- (6) PPT: "saṃs rgyas bcom ldan 'das."。
- (7) PPT; "ñān thos rnam sbyor bar" (聞く者に応じて)。
- (8) Sthirāmāti も同様に 「皆是方便世俗施設。非勝義諦。」(大正藏經第30卷 p. 156c4—5) と, 勝義としての輪廻を否定している。
- (9) PPTによると, 「世俗の主張」としてである。
- (10) 以下『中頌』に関しては, Prasannapadā (pub. par L. V. Poussin, rep. 1950) よりのサンスクリット文を掲げておく。
pūrvā prajāyate koṭirnety uvāca mahāmuniḥ /
saṃsāro 'navarāgro hi nāsyādirnāpi paścimaṃ // [p 219, II. 2—3]
と, チベット訳(『般若灯論』及び Prasannapadā の)とは多少異っている。
- (11) 先にある "thog ma dañ tha ma" とは偈頌の "navarāgro" のことであろう。それに対し後のものは, "thog ma dañ tha ma dag" とある。これは, single で示されている偈に対して, dual 或いは plural を示すものと考えられる。「いくつかの輪廻」ということを考えて, "dag" を plural ととることもできるが, ここでは「前と後」という dual ととった。それとも, Prasannapadā にあるように, "ādir-api-paścimaṃ" ととるべきであろうか。
- (12) tib. : tha sñad, skt. : vyavahāra.
- (13) PPTによると, "rdzogs byed la sogs" とある。
- (14) PPTによると, このような人々には, 聖教量により論証されるので, 推論式を示す必要はない, とする。しかしこの後に外道の教典などにより心が転倒しているものに対しては, 推論式を示すべきであることを示していることから, Bhāvaviveka は, 聖教量に対して, 絶対的なものとしては考えていなかったことがうかがえる。江島恵教「Bhāvaviveka の聖典観」『日本印度学仏教学研究』17—2, 1969参。
- (15) PPTによると, Mahādeva, Viṣṇu, Hiraṇyagarbha, Kapila, Kaṇāda, Akṣapāda, Vardhamāna* ('phel ba) など。
- (16) PPTによると, Yogacāra (rnal 'byor pa) のものである。
- (17) PPTでは, このことについて「十四無記」をあげている。「十四無記」の出典資料に関しては, 三枝充徳『初期仏教の研究』1978, pp.45—54参。
- (18) P. D. AP. AD. いずれも, "skye bu 'am gshan yañ ruñ ste" とあるのだが, 後に喩例の否定が続くので, "ma (skt:na)" を入れて訳した。それとも, 他の読み方が可能であろうか。
- (19) PPT; "me la sogs pa" (火など)。

『般若灯論』第11章試訳（望月）

- (20) PPT; "thig pa la sogs pa" (燃焼など)。
- (21) 第22章, P. tsha 269a5—269b4, D. tsha 214b6—215a4 において, ここと同じように, 一切智者に関して論じている。また P. tsha 165b7—266a2, D. tsha 212a6—212b1 において輪廻の前の辺際に関して触れている。
- (22) PPT には, "tshig le'ur byas pa dañ po'i skabs" とし, 本章の第一偈を引用している。
- (23) P. D. とともに "dpe ma grub pas" とあるが, PPT により, また, 意味の上からも "dpe grub pas" とする。
- (24) *naivāgraṃ nāvaram yasya madhyaṃ kuto bhavet /
tasmāunātropapadyante pūrvāparasah akramāḥ* // [220. 15, 221. 7]
- (25) PPT では, ここで Āryadeva の『四百論 (Catuḥśataka)』の第15章第5偈 (K. Lana, Āryadeva's Catuḥśataka, Copenhagen, 1986, pp.136—137) を引用する。なお, Buddhapālita も本偈を引用するが, Candrakīrti は, 同書の第8章第25偈を引用する。
- (26) 本書では, ここではじめて章の中心テーマである「生死」というタームがでてくる。これは, まず最初に輪廻の非存在を論じていることによるが, 他の註釈書には, これ程の否定論証はみられない。
- (27) *pūrvam jātiryadi bhāvejjarāmarāṇam uttaram /
nirjarāmarāṇa jātirbhavējīyeta cāmṛtaḥ* // [221. 9—10]
- (28) PPT によっておぎなうと, 前述の偈および註釈は, *sāvakaśavākya* (glogs yod pa'i tshig) であるからである。Bhāvaviveka は, Nāgārjuna 自身の偈に対しても, *sāvakaśavākya* であるが故に不十分なものであるとし, 自らによる推論式を示す必要を述べているが, ここではそれを明確に示している。さらに, 少し深読みをすると, 註釈については, Buddhapālita 批判とみることも可能であろう。文章はまったく一致するというものではないが, 論旨は同じである。(北京版 No. 52 42, tsa 239a7—239b2, デルゲ版 No. 3842, tsa 211b4—211b6) なお, *sāvakaśavākya* に関しては, 江島恵教, 前掲書, pp.131—138 参。
- (29) *paścājjātiryadi bhāvejjarāmarāṇamāditaḥ /
ahetukamajātasya syājjarāmarāṇam katham* // [222. 11—12]
- (30) 前註 (28) 参。
- (31) *na jarāmarāṇenaiva jātiśca saha yujyate /
mriyeta jāyamānaśca syāccāhetukatobhyah* // [223. 7—8]
- (32) PPT によると, 『中頌』第6章第3偈においてである。P. tsha 118b1—2, D. tsha 97a7—97b1。
- (33) *yatra na prabhavantyete pūrvāparasahakramāḥ /
prapañcayanti tāṃ jātiṃ tajjarāmarāṇam ca kiṃ* // [224. 6—7]
- (34) *kāryam ca kāraṇam caiva lakṣyam lakṣaṇameva ca /*

『般若灯論』第11章試訳(望月)

- vedanā vedakaścaiva santyarthā ye ca ke cana // [224. 13—14]
- (35) pūrvā nā vidyante koṭiḥ sasamsārasya na kevalam /
sarveśāmapī bhāvānām pūrvā koṭi na vidyante // [224. 15—16]
- (36) 原因と結果に関しても、前出の三つの仮定法を用いて、前後、同時ということ
を否定している。
- (37) PPTにおいて、特に、Sāṃkhyaの者とする。
- (38) PPTでは、これはSāṃkhya学派の因中有果説に対する反論としており、“saṅs
rgyas pa dag 'dod pa ltar 'bras bu sñon ma byuñ ba las phyis rkyen gyi
mthus byuñ bar smra ba'i gshuñ ltar ḥgyur ro”としている。
- (39) 前註(36)参。
- (40) PPTによると、同じように、感受作用と感受する者、認識根拠と認識対象、能
知と所知、解脱と解脱の特徴に関しても適用される、とする。
- (41) Candrakīrtiは、本章においては、生死の前の辺際などの前後関係を否定するこ
とに終始したのに対し、Bhāvavivekaは、論結においても、あくまでも「輪廻の
自性」を否定することを強調する。このことは、註(2)に示した。タイトルの違
いとも関係しているであろう。
- (42) PPTによると、“theg pa chen po'i mdo sde'i mtha' gshan dag las”とあ
るが、出典不明である。この引用は、『思釈炎』においても引用されている(註
(1)で示した箇所末尾)。野沢静証氏(前掲論文)は、「観音によれば、すべ
ての大乗経に出ずるとし或る特定の経文であるとはしない」としている。
- (43) チベット訳；'phags pa tshaṅs pa khyad par sems kyis shus pa shes bya
ba theg pa chen po'i mdo (北京版、第33巻、No. 827, phu34a6—8)。漢訳：
『持心梵天所問經』竺法護訳(大正、第15巻、No. 585, p.4b23—25)、『思益梵天
所問經』鳩摩羅什訳(同、No. 586, p.36c18—20)、『勝思惟梵天所問經』菩提流支
訳(同、No. 587, p.66c3—6)。
- (44) Suvikrāntavikrāmi-paripṛcchā-prajñāpāramitāsūtra (ed. by Ryusho H-
ikata, reprint, 1983, p.30. 1123—26), チベット訳；'phags pa rab kyi rtsal
gyis rnam par gnon pas śes rab kyi pha rol du phyin pa bstan pa (北京
版、第21巻、No. 736, tsi 43b4—6)、和訳；戸崎宏正訳『善勇猛般若經』(『大
乘仏典1』般若部經典、1973, p.134. 11. 2—4)。
- (45) 同上。ただし、オリジナル・テキストと文章の相違が多少あるので、原文を掲げ
ておく。“Suvikrāntavikrāmin……akṣyakoṭim anuprāptaḥ, akoṭir niryāṅak-
oṭikāḥ; na punar yathōcyate. Akoṭikā hi sarvadharmā, nir vāṅakoṭikāḥ.”
(同(44), p.12, 11. 20—24), チベット訳；(同, tsi 30a6—8), 和訳；(同, p.
98, 11.6—9)と、「前と後と中の(sñon dañ phyi ma dañ dbus kyi)」という文
はみられない。

Apendix

This is the notes of my paper "Seeking Rfefuge to Ratnatraya in the Bodhipathapradipa II° 25—26" (Journal of Indian Buddhist Studies, Vol. 37, No, 1, 1988). But it could not be printed in my space, so I print them this time.

NOTES

- 1) At first I wrote the title of résumé "The Confession of Faith for Ratnatraya," but I changed this time. I have no good English word for "śaraṇagamana (skyes su 'gro ba)."
- 2) I used the text from Helmt Eimer's Bodhipathapradipa (=BP, Wiesbaden, 1978) and refered to the Engliish translation (1) by A. Chattopadhyaya (Atiśa and Tibet, reprint, Delhi, 1981, with restored sanskrit) and the English translation (2) by Losang Norubu Shastri (Bodhipathapradipa, Bibliotheca Indo-tibetica VII, Varanasi, 1984, with restored sanskrit and tibeatn text) and the German translation by H. Eimer (BP, with tibetan text), but I couldn't catch the French translation (by J. Van den Broeck). About the Pañjikā, I used from Tibetan Tripiṭaka, Peking Edition No. 5344, Sde Dge Edition No. 3648.
- 3) Mr. Katsumi Mimaki taught me in the congress that H. Eimer called him Atiśa but he thought Atiśa becausd of ati-īśa (passing the lord). See Atiśa and Tibet, p.35.
- 4) The numbering of verse is different in each scholar. I followed H. Eimer's text that was indicated by lines.
- 5) See BP, p.210, p.223. The latter contains the text of commentary.
eg, Dbal byuñ dges pa' i mchod sprin (1764—1853), Brag dkar sprul sku Blo bzañ dpal ldan bstan 'dzin sñan grags (19C.)
- 6) The reason why I started from <2> is because I mean this section as one of them in the total structure.
- 7) ll. 25—26. tib. : rdzogs sañs bris sku la sogs dañ / mchod rten dam pa mñon phyogs nas.

- 8) According to BP p.176, this quotation is seen in the Śikṣāsamuccaya (skt. : ed. by C. Bendall, Bibliotheca Buddhica I, p. 10, ll. 11—13, tib. : P., ed., vol. 102, p.186, 2, 3).
- 9) See next section. It is Bodhicittotpanna.
- 10) (The sentence of this note is cut off.)
- 11) (The sentence of this note is cut off.)
- 12) In this text ratnatraya are two sorts, but in the Śaraṇagamanadeśanā (P. ed., No. 5350, D. ed., No. 3953) by same author ratnatraya are three. They are these two and clear comprehensible (skt. : abhisamaya, tib. : mñon par rtog pa) ratnatraya. About three sorts see 中村元『仏教語大辞典』上, p.487c.
- 13) tib. : mchod pa, skt. . pūja,
- 14) l. 25. tib. : me tog bdrug spos dños po dag.
- 15) Ordinary in case of material the word "dāna" is used, and this word was translated to "sbyin pa." But in this text the guessed word is "pūja."
- 16) l. 30. tib. : mchod pa rnam pa bdun dag kyañ.
- 17) tib. : sgrub pa' i mchod pa, skt. : pratipattipūja. See G. Nagao, Index to the Mahāyānasūtrālamkāra, p.162.
- 18) He didn' t mention their names.
- 19) (The sentence of this note is cut off. It is about the text of Bhadracarī.) D. Suzuki and H. Izumi ed., The Gaṇḍavyūhasūtra, p.5 43, l. 9-, kyoto, 1949, P. L. Vaidya ed., same title, Budhist Sanskrit Texts, No. 5, p.436, l. 20-, Dharmabhaṅga, 1961, Shindo Shirai-shi, Bhadracarī, 『山梨大学学芸部研究報告』, 第18号, 1962, tr., jap. : 岩本裕「華嚴經」『仏教聖典選 第五卷 大乘經典(≡)』, Tokyo, 1976, p.320-.
- 20) They are (1) bowing by body, words and mind, (2) poor body, (3) making them objects first, (4) expression of praise, (5) higher things, (6) spreme one and (7) three bundles.
- 21) They are (1) beautiful flower, (2) garland, (3) music, (4) ointment, (5)lamp, (6) incense stick and (7) dress.
- 22) This opinion is, though he didn't mention each sort of offering, perhaps the same with Atiśa.

- 23) After this, he quoted Samantabhadracārī 13—14 partially.
 24) H. Eimer studied about these offering in detail. See BP pp. 168—174.
 25) tib. : gñis pa ni sems rten dañ bcas pa dañ / bu dañ ma dañ / chuñ ma dañ la sogs pa'o / H. Eimer's interpretation : wird mit Hilfe von anderen Personen dergebracht.
 26) eg. Āryaratnamegha (P. ed., No, 897), Āryasandhimālātantra (P. ed., No. 432), Samādhicakrasūtra (P. ed., No. 907), Ratnolkadhāraṇī (P. ed., No. 472) and. Caryāpraveśa.
 27) There are many ornaments after this and the Ratnolkadhāraṇī (P. ed., No. 472, ha 39b1—2) is quoted.
 28) These are verse numbers of Bhadracarī. About text see note 19. I indicate the verse as following.

yavata keci daśaddiśi loke sarvatriyadhvagaṭā narasiṃhāḥ |
 tānahu vandami sarvi aseṣān kāyatu vāca manena prasannaḥ
 || 1 ||

yā ca anuttara pūja udārā tanadhimucyami sarva jinānām |
 bhadracariadhimuktibalena vandami pūjayamī jinasarvān || 7 ||

yacca kṛtaṃ mayi pāpu bhavyā rāgatu dveṣatu mohavaśena |
 kāyatu vāca manena tathaiva taṃ pratideśayamī ahu sarvam
 || 8 ||

yacca daśaddiśi puṇya jagasya śaikṣa aśaikṣapratyekajinānām |
 buddhasutānatha sarvajinānām taṃ anumodayamī ahu sarvam
 || 9 ||

ye ca daśaddiśi lokapradipā bodhivbudhya asaṅgataprāptāḥ |
 tānahu sarvi adhyeṣami nāthāṃ cakru anuttaru vartanatāyai
 || 10 ||

ye 'pi ca nirvṛti darsītukāmastānabhiyācami prāñjalibhūtaḥ |
 ksetrarajohamakalpa sthiantu sarvajagasya hitāya sukhāya
 || 11 ||

vandanapūjanadeśanatāya modanadhyesanayacanataya |
 yacca śubhaṃ mayi saṃcitu kiṃcidbodhayi nāmayamī ahu sarvam || 12 ||

Seeing verse (12), there are bowing, material offering, confession

- of sins, pleasing, asking and request in it.
- 29) Bhadracarī 1a, 3a, 2d is quoted.
- 30) cf. Āryatriskandhakasūtra (P. ed., No. 950, hu 76b6—77a8)
- 31) cf. Suvarṇaprabhasottamam (skt. : Buddhist Sanskrit Texts No.8 etc., tib. : P. ed., No. 174, 175, 176), Āpattideśanā (P. ed., No.53 68, 5369), Karmāvāraṇapratiprasabdha* (Suvarṇaprabhasottamam V ?) etc. And Āryākṣayamatipariṣcchāsūtra is quoted.
- 32) Āryacandradīpasūtra* ('phags pa zla ba sgron ma' i mdo) is quoted, and about asking, request and transformation into development, see the same text.
- 33) H. Eimer mentioned this word "adhyeṣaṇa", but I think it "abhiyācamī" because of tibetan words "de bshin du bskul ba" and not "rje su yi rañ ba." See the eleventh verse of Bhadracarī.
- 34) Āryasāgaramatipariṣcchasūtra (from Śikṣāsamuccaya), Āryapūrvasamudgatasūtra (from same text), Śikṣāsamuccaya' Bodhicaryavatāra and other sūtra are quoted. In detail, see note 36).
- 35) Āryavajracchedikābhagavatiprajñāpāramitā is quoted. See note 36).
- 36) (The sentence of this note is cat off.) About quotations in this part, see BP p.176—177.
- 37) A, Chattopadhyaya and L. N. Shastri restored this word to bodhisāra, but H. Eimer restored to bodhimaṇḍa (Kern der Erleuchtung). According to C. Das's dictionary and following sentence, I think H. Eimer is better.
- 38) l. 31—32. tib.: byañ chub sññ po'i mthar thug pa / mi ldog pa yi sems dag gis.
- 39) After this sentence, Āryagaganagañjapariṣcchāsūtra (P. ed., No. 815) is quoted.
- 40) l. 32. See note 38).
- 41) In detail see Prajñāpāramitopadeśasāstrābhisamayālamkāra. In this text the word that means irreversible is used nine times, eg. I—12, 56, II—21, IV—9, 38, 39, 45, 46, 51. (Th. Stcherbatsky and E. Obermiller, Abhisamayālamkāra-prajñāpāramitā-upadeśa-sāstra, Bibliotheca Buddhica XXIII, reprint Tokyo, 1977) cf. Aṣṭasāhasri-

kaprajñāpāramitāsūtra chap, X I X (梶山雄一, 丹治昭義訳「八千頌般若経 II」) pp. 107—127, 『大乘仏典 3』, Tokyo, 1975, E. Conze, tr., Aṣṭasāhasrikaprajñāpāramitā, pp. 121—129, Bibliotheca Indica, a collected of oriental works, works number 284, Calcutta, 1958, U. Wogihara, ed., Abhisamayālaṅkāra' āloka Prajñāpāramitāvākyā-hyā, pp.665—693, reprint, Tokyo, 1973.

42) tib.: so'i skye bo ñid las.

43) I don't know what meant the seventh stage. They ordinally used eighth or first stage about the irreversible. cf 桜部建『仏教語の研究』pp.60—65, Kyoto, 1975. About ten stage, see 山田龍城『大乘仏経成立論序説』pp. 197—313, Kyoto, 1959, 荒牧典俊「十地思想の成立と展開」『講座 大乘仏教 3 華嚴思想』pp. 76—120, Tokyo, 1983.

44) (The sentence of this note is cut off.)

45) The name of Tattvāvatārākhyasakalasugatavācasamṣkṣiptavyākhyāprakarāṇa (tid.: De kho na ñid la 'jug pa'i bstan bcos chen por gsal bar mdzad pa) by Jñānakittīśri (tib.: Dpal ye śes grags pa) is indicated.

See 西岡祖秀, 「『ブトン仏教史』II」, 「同 III」, 『東京大学文学部文化交流研究所施設研究紀要』, 第5, 6号, 1981, 1983, and Deb ther snon po (tid., 『青史』下, p.847, 中国・四川省, 1985, tr., eng., G. N. Rorerich, The Blue Annals, p.725, reprint, Delhi, 1976). In the Deb ther snon po, it is indicated as 'De kho na ñid la 'jug pa' and it is same as the Catalogue Section of Bu-ston's "History of Buddhism" No. 2765. But the title of Peking Edition is as 'De kho na ñid la 'jug pa bde bar gśegs pa'i bka' ma lus pa mdor bsdus pa'i rab tu gśegs pa'i bka' ma lus pa mdor bsdus pa'i rad tu byed pa,' and it is same as Bu-ston's No. 868.

46) (The sentence of this note is cut off.)

47) tib.: gsañ te.

48) l. 36. tib.: dañ por skyabs 'gro lan gsum bya.

See 増谷文雄, 『智慧と愛のことば 阿含経』, p. 211, Tokyo, 1965.

49) This fifteen sorts are mentioned in the Śaraṇagamanadeśanā by same author. See my translation and some comments about it. It is "A Small text of Atiśa (1) — Śaraṇagamanadeśanā —" but

under preparation of printing now.

- 50) The way of protection are (1) not bowing to other gods, (2) taking off harm and damage for others, (3) not associating with heathens and no worship to them, (4) difference of ratnatraya, (5) remembering the virtue and seeking refuge over and over, (6) remembering great kindness and effort for offering usually and offering foods and drinks, (7) remembering mercy and accepting other men like this way, (8) doing one's duty (9) and if having any purpose, offering for ratnatraya, begging and taking off other upāya in the world.
- 51) For particulars turn so Śaraṇagamanadeśanā, cf. Mahāyānasūtrā-lamkāra II. 宇井伯寿, 『大乘莊嚴經論研究』, pp. 63—64, Tokyo, 1960, but this part of chapter 2 is lost in sanskrit editions of manuscripts (Levi, Bagchi and Funahashi).

[付記] 本訳脱稿後、次の二書を得た。The Madhyamakaśāstra of Nāgārjuna, ed. by R. Pandeya, Delhi, 1988. 及び A Lamp for the Path and Commentary, The Wisdom of Tibet Series-5. trans. by Richard Sherburne, S. J., London, 1983 である。前書は、『般若灯論』（及び『無畏註』、『仏護註』）の還元梵文を含んでおり、後者は『菩提道灯広註』の英語訳である。これらを参考にして、本稿を見直すべきであったが、今回は時間的制約により見るができなかった。ただし、試訳の註(18)に関しては、Pandeya は、"puruṣaśānyadapi yujyate" と還元し、また一つマイナス要因が増えたことを記しておく。